

(2) 北海道の開拓村落における講集團

の形成と母村の文化的背景

—音更町南武儀のお日待組を中心に—

北海道拓殖短期大学 鷹 田 和喜三

一 研究の視点と課題

この報告は「母村と移住村の比較研究」の視点から、北海道の村落社会において「同一地域からの移住集團が村落形成の母体となる場合、その伝統文化が核となり、後来者をその社会に同化し、村落形成期の人口比率が同じ場合には文化的葛藤が起き、相互に同化し合う」という伝説（注・宮良高弘「北海道村落社会研究の一視点」）に準拠して、開拓村落における民間信仰の受容、講集團の形成と機能に関する事例調査を通して、開拓村落の形成と母村の伝統文化の関連性を考察することを課題とする。従来、北海道の村落の性格は仮説の後者の過程を経た村落を中心に議論されることが多かったが、前者の類型の村落も少なからず存在し、また移住村における入殖者の担って来た母村の伝統文化の継承と変容の研究成果は乏しいから、比較研究は北海道の村落研究の新しい視点

といえよう。講集團の調査は移動性の高い開拓村落の開拓過程をさぐる手がかりとなり、団体入植村落の場合は母村との関連交渉を考察する糸口を提供すると考えられる。

北海道における信仰的集團の分布と実態は最近実施された文化庁の「北海道民俗文化財調査」（注・調査結果は「北海道民俗地図」として刊行）により、ある程度明らかにされた。この調査は大正期を調査対象に設定しているから、一旦形成された講集團のなかで、あるものは消滅したが、あるものは個人、有志の信仰から村落共同の講集團へ発展した。講集團を形成、存続させた開拓村落の諸条件は何であったか。団体入植村落では母村の祭祀組織や信仰儀礼がどのように再組織、変容されたか。前者の問題は入植形態や村落の開拓過程、社会構造と深いかかわりを持ち、後者の問題は移住村における文化変容の研究テーマと考えられる。

二 調査地の概況と村落形成の母体

音更町は十勝平野の中央部に位置し、南武儀部落は同町のほぼ中央部に所在する、現住戸数二十五戸（うち四戸は非農家）、平均経営規模18hの畑作農村である。この部落は北側に隣接する武儀部落（十八戸。昭和十五年に分離）とともに、岐阜県武儀郡の旧・中有知村（現・美濃市生樹地区）の移住者を中心とする「武儀団体」により入植、開拓され、現在もその子孫と岐阜県出身戸数が過半数の十三戸を占める。この部落には鎮守の武儀神社の外に秋葉神社が存在し（両部落の共同祭祀）、お日待組（秋葉信仰の講集團）単位で、部落全戸加入のお日待行事が毎年四〜五回行われ、静岡県秋葉神社本社の護符が全戸に配札されている。部落内の寺院は母村と同じく曹洞宗であり、岐阜県出身戸の壇家が多い。

開拓と部落形成の担い手となった武儀団体は明治二十九年の長良川の氾濫による生活基盤の喪失を直接的契機に結成され、明治三十年から三十四年にかけて二十七戸が集団で現在地に移住した。団体の多くは昭和初期まで定着し、草分け入植者として、有力地主、自作層となり、部落の役職の多くは団員とその子孫が就任し、村落形成の母体となった。一世の団体の部落外転出と死去により、現在その直系子孫は七戸（分家をふくむ。武儀には三戸）のみであるが、団体の離農跡地と小作地には血縁、地縁関係を頼って、岐阜県からの個別入植者が多く、昭和二十年代頃までは、この部落では定着性、同郷性、同宗性、親族関係の結合紐帯の重積の度合いが相対的に高かった。

三 お日待組の形成・組織・機能

道内の他地域では火災が契機となり秋葉神社が勧請され、任意加入の秋葉講が形成された事例が多いが、秋葉信仰の盛んな同一地域からの団体入植者が村落形成の母体となった調査地では母村の信仰慣行が自然に継承され、入植直後からお日待行事が行われ、大正初期にお日待組の範疇が編成され、秋葉神社が創建され、後来の移住者を同化し、全戸加入の講集団が形成された。

お日待組は上・中・下の三組（武儀の上組では昭和三十三年に行事を中止した）があり、役職者や規約もなく、組内の各戸を輪番に会場（お日待当番、トウモト宿）にして行われ、行事内容と運営は各組により若干異なる。お日待組は信仰的機能の他に、開拓村落において多面的な諸機能を果たしたため今日まで存続したと考えられる。

四 講集団の比較考察

最後に、①近隣の富山県、愛知県の団体入植村落の講集団 ②個別入植村落の秋葉講 ③母村の秋葉講との比較を試み、移住村に母村の文化がどのように継承され、入植形態により講の存在形態にどのような相違が見られ、母村の祭祀組織がどのように変容されたかを考察する。